
カレーを作る人と食べる人

緑川賢治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カレーを作る人と食べる人

【Nコード】

N4005BA

【作者名】

緑川賢治

【あらすじ】

カレーを通してすれ違う恋愛物語！

前作に比べたらあまり時間をかけられなかったので不備や説明不足も多いと思いますが、感動をいただけると嬉しいです！

「駿ちゃん、私がカレー作ってあげる」

何年か前のクリスマスのことだった。

年末にもかかわらず両親が海外に出張していて、年の近い妹と二人でゆっくり年末特番を見ていた時のことだった。その子は、とても三人分とは思えない量の材料が入ったレジ袋を両手に抱えて、玄関に立っていた。一時間後に出来上がったカレーは、母がいつも作ってくれるカレーよりも少し辛くて、母が作るカレーと同じくらい優しい味がした。

「おいしい？」

と、不安そうに顔をのぞくので

「うん」

と答えると、うれしそうに笑っていた。

僕たちは高校生になり、十一月ももうすぐ終わりにさしかかっている。吐く息が白く、眼鏡が一瞬曇って、波が引くように消えていく。

「駿ちゃん、おはよ〜」

「その駿ちゃんってのやめろよ」

「気にしない気にしない」

紹介が遅れたが、こいつは幼馴染の佐藤春香。いつも、俺に対して世話を焼きたがる。それに関しては、助かっているので感謝の気持ちでいっぱいだ。

「そつえば知ってる？」

「何を？」

「新しく、公園前にカレー屋さんができるんだって」

「それくらい知ってるっの。俺を誰だと思ってるんだ？」

俺は、カレーが好きすぎて全国に何万とあるカレー専門店をめぐり、その経験を生かして、まだ高校生なのに、とある雑誌でグルメリポ

ートの仕事までしている。

「あのさ、そこがオープンしたらさ、一緒に行かない？」

「いいけど、平日ぐらいしかいけないぞ？」

「うん、それでもいいから」

「分かった。約束な」

土日は、できるだけカレーを県外に食べに行くようにしてるから、家にいないことが多い。仕事を始める前までは、自費だったからそんなに行けなかったけど、今では取材費として、何割かは出版社が出してくれるので少し多くなった。

「それと、二人で行くのが最初にしてほしいの」

「何で？」

「その店の店長が、私の知り合いだから、駿ちゃんのことを紹介したくて」

「うーん」

近所で新しく店ができたときには、一番乗りをするのも楽しみなんだけど（その日は学校を休むか、遅刻していく）春香の頼みなら、仕方ない。

「分かった。その代わりに・・・」

「？」

「また、カレー作ってくれよ。」

「分かった」

春香は、あの時のように笑ってくれた。

次の土曜日。俺は、広島のとある定食屋に来ていた。

「師匠、こんにちは」

「おう、駿ちゃん。いらっしやい」

この人は、この定食屋の店長で、岡藤辰雄さんという。俺が師匠と呼ぶのは、この人からカレーとは何なのかを教えてもらい、ずいぶんお世話になったからだ。

「野菜カレーください」

「おうよ」

十分開らいして、水と野菜カレーが出てきた。この食欲をそそるカレーのいいにおいとともに、目に飛び込んでくるこのボリューム！「よだれが止まりませんね」

「うれしいこと言ってくれるじゃないか」

スプーンですくい、口に運ぶ。

「やっぱり駄目ですか？」

「すまないね。雑誌で紹介してもらって、人気が出て、たくさんの人に食べてもらえるのもいいことだとは思っけど……」

「すべてのお客さんに愛を込めた品物を届けられないって言うんでしょう」

そう、なぜわざわざ広島まで足を運んでいるのかというと、このカレーを食べに来ているからだ。

「とりあえず、気が変わったら連絡ください。最高の記事にしてみせますので」

「根競べってどこだね」

昔ながらの定食屋に笑い声が飛び交う。

「そういえば駿ちゃんの地元に、新しくカレー専門店が出来るらしいね」

何で知っているんだろう？知り合いが営業するのだろうか？

「はい、そうらしいですね。知り合なんですか？」

「まあな。……くれぐれもよろしく頼む」

「分かりました。いつものとおり厳しくいきますから、ご安心ください」

「任せたよ」

ちゃんとカレーを完食して新幹線に乗り込み、帰宅した。

クリスマスも一週間後に迫った今日の学校でのことだ。

「……駿ちゃん」

泣きそうな顔で春香が話しかけてきた。

「どうしたんだ！？」

「ごめんね、ごめんね」

「謝ってばかりじゃ分かんないだろ」

「……カ、カレー」

「カレー？」

「……うん」

カレーといえば、今日は新しいカレー専門店がオープンする日だけだ。

「カレーがどうした？」

「うつ、ぐす」

このままでは本当に泣き出してしまいそうだ。クラスのみんなの視線が痛いように伝わってくる。

「わ、分かったから落ち着け」

俺は、一体何が分かったのだろうか。とにかくこのままじゃ、俺がこいつに何かしたみたいになってしまふ。この状況を解決するには

……「！」

「春香、知ってるか？」

「……何を？」

「カレーをおいしくする三つの方法」

「何それ、教えて！」

思ったより食いついてきた。

「三つあって、一つ目はスパイス。二つ目は料理人の腕」

「うん」

「そして、三つ目は相手を思う気持ち」

「うん！」

と言うと、笑顔で自分の席に帰って行った。いったいなんだっただろう。ちなみに、今の話は、いろんな有名な料理人や、実際食べておいしかったカレーを作った人に聞いた話をまとめたものだ。一つきれいごとにしか聞こえないものがあつたが、岡藤さんのカレーを食べてから、つくづく正しいと思うようになった。

放課後、春香に会いに行った。春香は陸上部に入ってるので、練

習が終わるまで待つことにした。あと一時間くらいだろうか。

「あのくすみませくん」

「え、あ、はい」

陸上部の練習を見ていると聞き覚えのない女子の声が背後からしたので見てみると、やっぱり知らない女子が立っていた。

「今、時間いいですか？」

「えっと、その前に……どちら様？」

「あ、すみません。私は一年五組の仲里葵です」

「ごめん知らない」

「いや、話すのも初めてですし、一組と五組は棟も違いますから」

「あれ、一組って言ったっけ？」

「あ、いえ、私は料理研究会にはいつて、研究会では浅木くん有名ですから」

「そうなんだ。てか、同じ学年だから、そこまで敬語使わなくていいよ」

「すみません」

「さっきから謝ってばかり」

「すみません。あつ」

恥ずかしがって顔を伏せてしまった。しまった黙り込んでしまった。きまずい。ひじょーにきまずい。

「で、時間ならあるよ」

「じゃあ、来てくれますか」

ここでは話にくい話なのだろうか。まだ時間はあるし、いいか……

「な……？ い、いやいやいやや！ これは、あれなんじゃないかな！？」

「い、いいよ？」

「くす、なんで疑問形なんですか」

くすつてなに！笑顔かわいい！はっ、なんだこの寒気は！後ろ……！？

「速く行こう」

「え？はい」

春香が見てた。どうしようかなー。あとでなんて言おうかなー。そんなことよりどこに行くんだろう。

「ここです」

「うん……つて、なんで家庭科室？」

「眺めがいいからかな？」

「疑問形だね」

「ふふ、そうですね」

空気は和んだ！

「一度話がしたかったんですよね」

「何の？」

「春香について」

「え？」

「今日、泣かしたらしいですね」

「いや、厳密には泣く手前かな」

空気は凍りついた！

「私は、春香さんの友達です」

「アーユーハルカズフレンド？」

「イエス」

どういうこと？

「では、本題に入りましょうか？」

「泣かせたことか？いや、泣かせてないけど」

「分かっていますよ。春香さんから聞いています。あなたのこともいろいろと」

春香は俺のことを何と言っているのだろうか。気になるけど、聞ける雰囲気でもない。

「へーそうなんだ」

ていうか、長年春香と一緒にいるが仲里さんとやらと、春香が一緒にいるところを見たことがない。

「ここに呼び出させていただいたのは、あなたに死んでいただくた

めです」

「え？」

「今なんて言った？」

「ここには包丁とかいっぱいあるでしょう。だから、殺りやすいかなと思って」

先ほどまでにあれほど可愛く見えていた笑顔が、急に憎悪に満ちた顔に見えてきた。

「冗談だろ？」

「冗談だけで、こんなところに呼び出すわけありません」

と言うと、棚の方へ歩いて行き、扉を開けた。

「何で？ 理由は？」

「目障りなんですよね、結局。春香さんのまわりにいつもいるあなたが」

「いいだろ、別に」

「そんな覚悟だから、春香さんはいつまでも悩み続けないといけないんですよ」

悩み？

「今日の春香さんの様子見ておかしいと思わなかったんですか？」

「確かにそう思った。だから、さっきあそこで待っていたんだろ」

「でも、私についてきた」

うつ、痛いところを突かれた。

「まあ、告白かと思っただし」

「だ、だれがあなたなんかに！」

「はー、もう悔いはないよ……って告白してもないのにふられて死ぬるか！」

「まあ、告白なら断ったけどね」

「え？」

「だって、あいつのこと好きだし」

「今なんて……」

「だから、僕は春香のことが好きなんだよ。ずるずると先延ばしに

してたけど、ちゃんとと言わなきゃいけないって思ってたんだ」

ここからはよく陸上部の練習が見える。だから、いい眺めって言うてたのかな。

「じゃあ、そういうことで」

「ちよつとまって……ください」

右手をつかまれた。仲里さんの手には、何か長細いものが。まさか本当に包丁！

「これ、受け取ってください」

「え、何これ？」

「春香さんに渡せば分かりますと思います」

「わ、分かった」

「急いでください！ もう、練習終わりましたよ！」

「ありがとう」

箱らしきものを受け取って、家庭科室を出ようとしたが、その前にやることがある。

「仲里さん、告白断るって言ったけど、あんたの笑顔は春香と同じくらい可愛かったよ」

「バカなことやってないで早く行ってください！」

前言撤回、照れた顔も可愛い。

急いでグラウンドに出たが、もう春香の姿はなかった。校門から出ると、公園へと続く長い坂道に春香の姿があった。距離は五百メートルくらいだろうか。走ってきたので息が上がって、声がうまく出せない。

「はあ……はあ、はあ」

春香、早すぎ。確か女子の高校生記録の少し下が自己ベストとか言ってたなかったっけ。そんなやつに追いつけんのか。あつ、止まった。公園前、カレー屋！

「春香！」

「あつ、駿ちゃん」

「悩み……てか、二人で行くんじゃなかったのかよ」

「ごめん、呼び出されちゃって」

呼び出された？

「おせえぞ」

店から出てきたのは、二十代くらいの若い男だった。

「お兄ちゃんが急すぎなの」

「お兄……ちゃん？」

あれ？ 春香に兄弟はいなかったはずだけど。

「えっと、そちらさんは？」

「こっちは駿ちゃん」

「あーボーイフレンド」

「そ、そんなんじゃないって！」

そこまで否定しなくてもいいのに。

「どうもです」

「あ、よろしくね。俺は、春香の従兄の入塾冬夜っていいです。ここで、カレー屋やってます。良かったら食べてく？」

「今はちよっと」

「ただならー！」

「いいのかよ！」

「え、だめ？」

「……勝手にしろ」

店に入って行く。なかなか雰囲気のある店だ。清潔感もある。でも集客率は初日にしては少ないかな。

「いい感じの店だろ」

「でも、初日には客が少ないですよね。排気坑どこにあります？　ここは、丘の上にありますから、もっとカレーのにおいを坂の下に送ることによって、もっと集客を望めますし、公園の前に送れば、家族ずれの集客も見込めます。そういうことを出来ないと、すぐつぶれますよ」

「え……君は一体」

「こっぴうものです」

名刺を渡すと、表情が変わった。

「どうぞ、お座りください」

「お勧めは？」

「野菜カレーです」

「じゃあそれを」

「少々お待ちください」

数分後、カレーが出てきた。

「どうぞ、野菜カレーです」

「いただきます」

色、におい、見た目はすばらしい。味は……。

「駄目ですね」

「え、十分おいしいと思うけど？」

「そうだ、どこがいけないってんだ！」

「岡藤さん知っていますよね？ てか、知らないって言ったら、あきれますけど。これ、岡藤さんのカレーの劣化版みたいなものです」
「……」

「凶星ですね。確かに似ている。でも決定的に足りないものがある。それが分からないようなら、あなたは料理人に向いてない」

「分かってるよ、愛ってやつだろ。いつも言ってたよ。あの人のカレーは確かにうまい。でも、もっと多くの人に食べてもらいたいとは、思ってたない。俺はこのカレーをもっと多くの人に食べてもらいたい」

「岡藤さんは、あなただけのカレーを作ってほしいと思ってると思いますよ。岡藤さん、あなたのことを心配していました。あなたの作ったカレーはあなたのもの。岡藤さんが作ったカレーは岡藤さんにしか作れない」

「でも」

「でも、じゃない！ あんたのやっていることは、岡藤さんのカレーをけがしているんだよ。あんたの店なら、あんたの味で勝負しろよ！」

「……すまない。あんたもあの人のカレーが好きだったんだな」
「大好きだよ」

「オリジナルで勝負できるようになったら、また来てくれよ」
「もちろん」

あれから、一週間何事もなく過ぎた。もうクリスマスだが、家には誰もいない。妹は友達の家でクリスマスパーティー。「ピンポン」とインターホンが鳴る。

「はい」

玄関の戸をあけると白銀の雪が降る中、春香が鍋を持って立っていた。

「寒かったろ」

「まあね」

「入って、入って」

「うん」

こたつを挟んで無言の空間が広がる。

「そ、そういえば、仲里さんって知ってる？」

「うん、友達だよ」

「へー、これその仲里さんから預かったんだけど」

「あ、これ、駿ちゃんへのプレゼントだよ！ 無くしたと思ってたら、葵ちゃんが持ってたんだ」

「え？」

「だから、もう一個同じの買っちゃった」

春香はもう一つ同じものを取り出した。

「開けていい？」

「うん」

入っていたのはカレーのストラップだった。

「ありがとう、それは春香が持ってた」

「うん」

また、静かな空間が広がる

「あ、そうだ。カレー食べよ」

「うん」

カレーのいいにおいがする。炊きたてのご飯に、温めなおしたカレーのルーがかかり、さらにおいしそうに見える。

「食べて、食べて」

「うん」

やっぱりおいしい。これまで食べたどんなカレーよりも。春香が作ったカレーは。

「春香、知ってる？」

「何を？」

「好きな人が作ってくれたカレーは世界で一番おいしいってこと」
もうこれ以上のカレーには会うことができないだろう。

「世界で一番おいしいよ」

（後書き）

いかがだったでしょうか？よかったらブログやt w i t t e rの方
もよろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4005ba/>

カレーを作る人と食べる人

2012年1月10日16時54分発行